

令和七年二年度 御報恩御講

寂日房御書

弘安二年九月十六日

五十八歳

經に云はく「日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅す」と此の文の心よくよく案じさせ給へ。「斯人行世間」の五つの文字は、上行菩薩末法の始めの五百年に出現して、南無妙法蓮華經の五字の光明をさしいだして、無明煩惱の闇をてらすべしと云ふ事なり。日蓮等此の上行菩薩の御使ひとして、日本国の一切衆生に法華經をうけたもてと勧めしは是なり。 (二三九三頁)

本抄は、戒壇の大御本尊が御図顕される約一カ月前、弘安二（一二七九）年九月十六日、日蓮大聖人が御年五十八歳の時に、身延において認められました。本抄の末文に「此の事寂日房くわしくかたり給へ」（御書一三九四）とあり、寂日房を使者として、大聖人のご両親に関係のある安房国に住む強信の婦人に与えられたと推測できます。

内容は、まず受け難き人身を受け値い難き仏法に出値い、南無妙法蓮華經の題目の行者となったことを称賛されています。次いで「日蓮は日本第一の法華經の行者なり」（同一三九三）と述べ、すでに法華經勸持品二十行の偈を身読したのは日蓮一人であることを明かし、この日蓮を生んだ父母は一切衆生の中でも大果報の人であると仰せられています。また、日蓮との名乗りは自ら仏の境界を悟った故であるとされ、この日蓮の弟子・信徒となることは宿縁が深いためであると思つて、日蓮と同じく法華弘通に邁進すべきであると教えられています。そして、この御本尊は後生の恥を隠す冥土の衣装であるとし、信心を怠らずに南無妙法蓮華經と唱えていくことを督励されて、本抄を結ばれています。

ところで、「日蓮は日本第一の法華經の行者なり」とありますが、これは即ち、日蓮大聖人ご自身が末法の御本仏であるとの宣言です。それはなぜか？と言えば、法華經の『勸持品』の二十行の偈の文は「日本国の中には日蓮一人よめり」と言われているのです。「よめり」とは、身口意の三業をもつて経文どおりに読み、ご修行なされたことを言われているのです。ほかの国はいざしらず、日本国には開闢以来、實際身の上に行じられたのは日蓮大聖人様お一人だけであるからです。

法華經の行者とは、法華經の教説に従い、身をもつて修行し、法華經を弘通する人のことであります。勸持品の二十行の偈では、仏の滅後の後、恐怖惡世の中において法華經を広く説く時に「三類の強敵」があらわれることが説かれております。

「三類の強敵」とは、釈尊の滅後、法華經の行者に対して様々な形で迫害する三種類の邪人をいいます。法華經勸持品第十三には、八十万億那由他の菩薩が、仏滅後の法華經の弘通を誓つて二十行の偈文が述べられています。この二十行の偈文の中に、仏滅後の惡世に三類の強敵が出現して様々な迫害を加えられるけれども、必ず法華經を弘道していくとの決意が記されているのです。

「三類」とは、勸持品二十行の偈文の内容から、妙樂大師が「法華文句記」の中で名

付けたもので、第一に俗衆増上慢、第二に道門増上慢、第三に僭聖増上慢をいいます。「増上慢」とは、最勝の法を未だ証得していないにもかかわらず、証得したと自惚れ、他の人よりも勝れていると高ぶる者のことをいいます。

第一の俗衆増上慢とは、法華經の行者に対して悪口罵詈し、刀や杖をもって迫害する仏法に無知な在家の人々のことです。

第二の道門増上慢とは、自己の慢心のために法華經の行者を惡み、危害を加える諸宗の僧侶をいいます。

第三の僭聖増上慢とは、世の人々から聖者のように尊敬されるものの、その心は常に世俗のことを思つて利欲に執着している邪僧をいいます。この邪僧が、国王等をそのかして法華經の行者に難を加えさせるのです。

妙樂大師は、この三類の強敵を忍ぶ難易について、「法華文句記」の中で、「初め（俗衆）は忍ぶべし、次（道門）は前に過ぐ、第三（僭聖）最も甚だし、後々の者は転識り難きを以ての故なりし」と釈していますように、三類の中でも第三の僭聖増上慢が最も激しい、しかも巧みな手段を用いて迫害します。なぜなら僭聖増上慢の正体は容易に見破ることはできないからです。

迹化の菩薩衆（インドに於いて釈尊の弟子となり、菩薩と成った人々）は、このような三類の強敵による数々の難に対し、いかなることがあろうとも法華經を弘通すると釈尊に誓います。ところが釈尊は、迹化の衆にはこの大難は耐えられないとして地涌の菩薩を召し出だし、末法流布の付嘱を託されたのであります。

この地涌の菩薩の上首上行菩薩が、末法濁惡の世に出現された日蓮大聖人なのです。

開目抄（五四一頁）に、「法華經の第五の卷、勸持品の二十行の偈は、日蓮だにも此の国に生まれずば、ほとをど世尊は大妄語の人、八十万億那由他の菩薩は提婆が虚誑罪（妄語をもつて人を欺き、惡道におとす罪）にも墮ちぬべし。（中略）但日蓮一人これをよめり」とありますように、大聖人は妙法弘通のために勸持品の二十行の偈文を悉く身読され、三類の強敵を悉く退散せしめられて、法華經の一文一句のすべてが正義であることを実証されました。そして、御自身が末法の本仏であることを顕され、本門戒壇の大御本尊をご建立あそばされたのです。

故に「すでに勸持品の二十行の偈の文は日本国の中には日蓮一人読めり」と仰せになったのです。ですから、日本第一の法華經の行者であり、末法の御本仏たることを示されたのであります。

また「法華經・釈迦如来の御使ひ」と言われるのは、大聖人が法華經如来神力品第二十一において滅後の弘通を付嘱された地涌の菩薩の上首、上行菩薩の再誕であるとの意味からです。しかし、それは外用の辺を示されたもので、御内証の辺からいえば、本地・久遠元初の自受用身の再誕であられ、末法の主師親三徳具備の御本仏であられるのであります。

ところで又、「名は体をあらわす」とも言われていますが、一切のものにわたって、名前こそ大切なもののなのです。天台大師も妙法蓮華經の五字を解釈するにあたって、名体宗用教の五重玄という意義を連ねておりますが、その第一に名玄義ということ掲げております。私が今日蓮と名乗っていること、これは仏の無師独悟（師無くして一人で悟りを開くこと）という言葉と同義語の自解仏乗の表明とも言って差し支えないのです。

「自解仏乗」とは自ら仏の境界を解ること、もとは天台大師が師伝を待たずに法華三昧を証得したことを指して言われた言葉です。大聖人も自ら久遠元初の自受用報身の再誕であることを覚られたが故に「日蓮」と名乗られたのです。このように言うとき世間の人は賢ぶっているように思うかも知れないが、道理が指示するところはどうしてもこうならざるを得ないと経文を擧げて述べられているのです。その道理とは、法華經の神力品には「日月の光明の諸々の幽冥を除くがごとく、この人世間に行じてよく衆生の闇を滅す」とあります。この文は、法華經の会座において結要付嘱がなされたあと、上行菩薩を称歎している文です。「斯の人世間に行じて（斯人行世間）」の五の文字は、まさに上行菩薩が末法の始めの五百年に出現して、日月の光明の如く南無妙法蓮華經の五字のたいまつ（たいまつ）の光をかかげてに衆生の無明煩惱の闇を照らすという意味であり、大聖人の「日蓮」と御名はこれと合致していると言われているのです。なぜなら、地上の水は月がもたらしました。その水の中に清らかな花を咲かせる蓮華はその「月の精」なのです。ですから、日蓮すなわち「日月」と言われているのです。

その次ぎに引かれた経文は、前の神力品のすぐ後の部分で「我が滅度の後においてまさにこの経を受持すべし。この人仏道において決定して疑いあること無けん」とあります。仏の滅後末法濁悪の世の人は、上行菩薩に結要付嘱された法華經の三大秘法の御本尊をしっかり受持信行していきなさい。この人仏道において、必ずや仏界を湧現して、一生の内に成仏を遂げることができないところは疑いあるところである、ということであります。そして、本抄の最後の御文には「信心をこたらずして南無妙法蓮華經と唱へ給ふべし」と御指南なされておりますが、これは、御本尊様を受持して生涯、怠ることなく、信心をまっとうして自行化他にわたるところの唱題をしていくことこそ大事なことでありと申されて信心の基本を教え励まされて本抄を結ばれているのです。

ところで、本日拝読の御文に引用されている「斯人行世間」の五文字について、大聖人は「人の文字をば誰とか思し食す、上行菩薩の再誕の人なるべしと覚えたり」（右衛門大夫殿御返事・御書一四三五）と示されています。また、本抄において「一切の物にわたって名の大切なるなり（中略）日蓮となる事自解仏乗とも云ひつべし」（同一三九三）と仰せられ、さらに「明らかなる事日月にすぎんや。浄き事蓮華にまさるべきや。法華經は日月と蓮華となり。故に妙法蓮華經と名づく。日蓮又日月と蓮華との如くなり」（四条金吾女房御書・同四六四）とも示されています。まさに、大聖人御自身こそ法華經に予証された、日月のごとく衆生の闇を照らし、濁悪の世にあって常に蓮華のごとく清らかに法を説く者

にほかならないことを明かされているのであります。

また、『開目抄』に「仏世尊は実語の人なり、故に聖人・大人だいにんと号す」（同五二九）と仰せのごとく、三世を通達する「聖人」との意義、そして衆生を成仏へと導く本仏という「大人だいにん」との意義の上から、私達は御自らの名乗りであり仏の別号でもある「大聖人」と尊称申し上げるのです。私達は、末法において一切衆生を救済される仏は日蓮大聖人ただお一人であること、成仏の大法はその御本仏の法魂まします本門戒壇の大御本尊に極まることを強く確信し、日々の信行に一層精進することが大事なのです。

大聖人は、常に人々の幸せを願って忍難弘通の御化導を示されました。私達弟子・信徒は、本抄において「かゝる者の弟子檀那とならん人々は宿縁ふかしと思ひて、日蓮と同じく法華経を弘むべきなり」（一三九四）と仰せのごとく、大聖人様との過去世からの因縁を自覚し、懸命に折伏を實踐して、広宣流布への前進を図ることが大切です。

総本山第六十七世日顕上人は、「ここで考えなければならぬことは、御婦人に対して『日蓮と同じく法華経を弘むべきなり』と仰せになっていることでもあります（中略）この『寂日房御書』を拝しても解るとおり、大聖人の正法を信じ奉る僧俗は共に他に向かつて折伏し、自行化他の修行に精進しなくてはならないのであります」（日顕上人全集一一一一〇八）と指南されています。やはり、私達の信心修行の要は僧俗一致・異体同心としての折伏実践、これに尽きるのです。

日如上人猥下は「過去・現在・未来と続く三世において「法華経」すなわち本門戒壇の大御本尊様から離れないことが最も大事である（中略）「受くるはやすく、持つはかたし。さる間成仏は持つにあり」（御書七七五）との御聖訓を拝し、昼夜朝暮に怠りなく信心に励んでいくことが、私どもの一生成仏にとって最も肝要であることを銘記すべきであります。（大日蓮・令和六年十二月号）と御指南になっています。

今月は、宗祖日蓮大聖人御聖誕の月です。大聖人の御出現あつてこそ、私達は正法を信じ修行することができるのでから、御報恩のため、真剣に唱題を重ねて折伏に打って出ることが何よりも肝心です。そこに、必ず自身の罪障消滅と幸福への善因があることを固く信じ、共々「活動充実の年」にふさわしい信行に徹しようではありませんか。

（令和七年二月度御講の砌）